

愛知大学と沖縄をめぐって

東亜同文書院大学記念センター研究員 佃 隆一郎

ただ今ご紹介にあずかりました、愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員の佃と申します。今回の私の発表は、昨日の馬場センター長のご発表を受け継ぐ形で、東亜同文書院大学から愛知大学に引き継がれたものを最初に紹介します。そして、「A. 愛知大学卒業生と沖縄」として、創立当初を中心とした愛知大学卒業生と沖縄とのつながりを述べて、最後に「B. 豊橋校舎に残る『旧軍遺跡』」として、この東亜同文書院記念センターが入っています建物や、そこでの展示などの活動について紹介したいと思います。

まずは、皆さんのお手元に、東亜同文書院大学と愛知大学についてのカラー写真がたくさん載っているチラシ(右の写真)があるかと存じますので、それをあわせてご覧下さい。愛知大学は、1946(昭和 21)年 11 月、前年閉校になった東亜同文書院大学(上海)の本間喜一学長をはじめとする教員・学生有志によって、愛知県豊橋市の旧陸軍学校跡に創設されまして、敗戦からのいち早い設立には本間先生方の努力とともに、豊橋市長らの協力によるものがありました。

「東亜同文書院」の名前をそのまま引き継ぐことは、占領軍との兼ね合いからできなかったのですが、昨日の学長のお話でありましたように、「愛知大学」としたのは、単に愛知県に創ったことだけでなく、「知を愛する」という意味もこめるものでした。

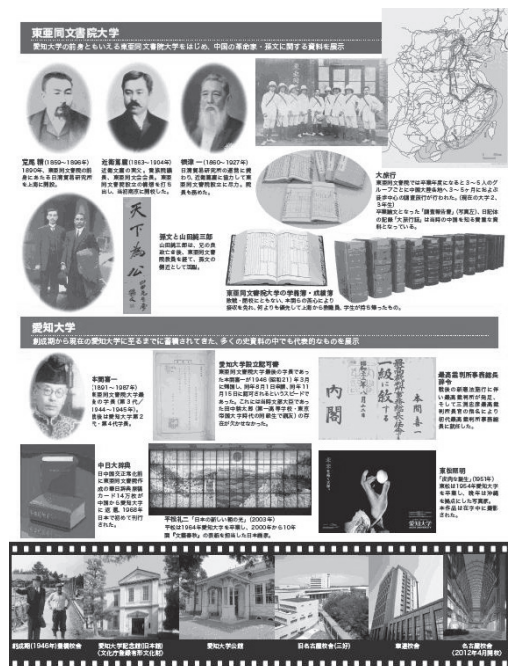
名前こそ違うものになりましたが、東亜同文書院大学から愛知大学には、中国語の辞書『中日大辞典』がまず受け継がれました。東亜同文書院が編集していた辞典資料を戦後しばらくして中国政府から愛知大学に返還されたことで、編集が再開され、最初の版は今から 40 年ちょっと前に出来上がりました。そして続々と新しい版もできています。

中国の各大学との交流も、国交の回復前から進

められていました。1997(平成 9)年には当時の名古屋キャンパスに現代中国学部が新設されて以来過去東亜同文書院で行われた中国語教育、さらには現地調査が受け継がれています。中国をはじめとする外国からの、交換教員や留学生の受け入れも進められています。

そして、愛知大学は 2012(平成 24)年には名古屋市駅付近に新キャンパスを開校し、現在、名古屋市内 2 か所と豊橋市に展開する文科系総合大学になりました。

そして「A. 愛知大学卒業生と沖縄」についてですが、創立当初の学生の傾向として、創立時は東亜同文書院大学のほか、京城帝国大学や台北帝国大学などの「外地」各大学からの引揚者とともに、愛知県出身で県外の大学予科に在籍していた



人の「Uターン転入学」が多く、同文書院大を中心に当時の内地・外地双方から学生が集結していました。これは「学生を広く受け入れる」という、当局の方針によるものでして、東海地方以外からの入学者は、大陸に近い山陽や九州の出身者が主体となりました。

創設期(旧制予科・学部生在籍時、1953 年まで)の沖縄出身者は、旧制・新制、卒業・中退を問わず、1名のみ存在でした。そのお方、ここではあえて「K氏」とイニシャルにいたしますが、1928(昭和3)年生まれのKさんは、1942 年に沖縄二中に入学しまして、戦争が激化した 1944 年、その関係から熊本中学に転入しました。終戦後の 1947 年5月から 49 年3月まで、愛知大学予科に在学しまして、そのまま1949年5月、新制の学部に進学しましたが、1953 年以降、退学となりました。ただし同窓会名簿には、「推薦校友」として記載されておりますので、何らかの事情があったかと思われます。その後沖縄に帰ったKさんは、那覇市に居住しまして、同名の建設会社、ここは沖縄では有名などころのようですけど、社長や経営者の身内だったかはわかりませんが、そこに勤務しました。

その他創設期の、沖縄関連の卒業生としましては、まず西清水氏があげられます。昨日も本日も、会場にお越し下さっているとのことですが、1926(大正 15)年鹿児島県に生まれた西さんは、奄美大島の方ですので沖縄の隣りといえますが、1944 年に地元の大島中学を卒業後、東亜同文書院大学専門部に入学して、書院の閉校、引揚げ後 1947 年に愛知大学旧制予科に転入学し、翌 48 年同旧制法経学部経済科に進学しました。1951 年に卒業したのち、沖縄に移住した西さんは、復帰前の 1967 年から、愛大同窓会の初代沖縄支部長を、1991 年までの長きにわたって務めまして、ホテル西部オリオン会長なども歴任しました。

続いてあげられますのが、先ほど亡くなった、写真家の東松照明氏です。この方は日本画家の平松礼二氏とともに、愛知大学を卒業した代表的芸術家といえる方でして、1930(昭和5)年に名古屋市で生まれました。1950 年愛知大学に入学して写真部に入り、写真活動を始めた東松氏は翌年、大学の写真展に「皮肉な誕生」などを発表し、注目を

集めました。卒業後に岩波写真文庫の制作スタッフを経てフリーになり、1958 年に第1回日本写真批評家協会賞新人賞を受賞しました。

その東松氏と、沖縄との関係について続いて見てみましょう。亡くなった直後に新聞で上野昂志氏は、東松氏の作品の主要主題を、a. 米軍基地の撮影から始まる「占領／アメリカニゼーション(アメリカ化)」。b. 被爆の記憶から始まる、長崎をテーマにした写真。c. 基地を入口にしなが、その後独自に展開する沖縄シリーズ。d. 東京などの都市シリーズの4つに定義・分類しておりまして、いずれも 1960 年代前後に始まり、戦後の日本社会を独自の視点から総体的にとらえているとしまして、対象を追い続ける持続性と、新たな対象への展開性が特長としています。そしてcの「沖縄シリーズ」ですが、東松氏は父親の実家近くにあった米軍基地の撮影から始まり、1969 年に復帰前の沖縄を訪問した時、基地から浸透して日本を覆う「アメリカニゼーション」を受容しない独自の文化が沖縄にあることを発見し、沖縄を毎年訪問(のち移住)して島々を巡るようになり、『光る風－沖縄』などの作品を生み出したとされています(『中日新聞』2013 年1月 17 日夕刊)。

東松氏は昨年末の 2012 年 12 月 14 日、那覇市で生涯を終えましたが、「年末年始に自分の死を発表するのは控えてほしい」という遺志により、公表は翌年になりました。東松氏につきましては、別室の展示でも詳しく紹介していますので、よろしく願います。

ここでの終わりに、その後の代表的な、沖縄関連の愛知大学卒業生といたしましては、まず、このあと午後にご講演されます百田勝彦氏、1965 年に当時の法経学部経済学科を卒業されまして、現在沖縄税理士会の会長を務めておられます。さらに、法経学部が分かれてからの 1997 年に経済学部を卒業した、あの岩瀬仁紀氏、中日ドラゴンズの投手ですね。毎年球団のキャンプで沖縄に来ております。ちなみに先ほど申しましたように、昨日ここで挨拶をしてくださいました学長が、ちょうど今ごろキャンプ地で岩瀬投手を激励していると思います。その他、大学院の卒業生で、沖縄の大学の専任教員になっている方も、私の知っているところで2

人いまして、そのうちの1人は昨日会場に来て下さいました。

さて、次の「B. 豊橋校舎に残る『旧軍遺跡』」ですが、愛知大学発祥の地であります豊橋校舎の特色の一つに、キャンパスの内外に旧日本陸軍が造った建物が何点か現存していることがありまして、これら「旧軍遺跡」への参観者も相当数あります。本学のものに限らず、旧軍遺跡は「戦争遺跡」の“仲間”として、近年存在が注目されています。ただ本学当局が「愛知大学には旧軍遺跡がある」と強調しているわけではありませんが、沖縄の各種戦跡とともに紹介している本もあります。

その中の「大学記念館」についてまず紹介しますと、ここには現在この東亜同文書院大学記念センターの事務室や関連展示室(同文書院・愛大史)などが入っています。

この建物は、1908 年、豊橋市に進駐した旧陸軍第十五師団の司令部として建設されまして、敗戦直後には、創立された愛知大学の本館に再利用されて、「愛大のホワイトハウス」として教職員や学生に親しまれました。1996 年に新しい本館が造られたことで、本館としての役目は終えましたが、歴史的な価値が認められたその建物は、1998 年に文化庁から登録文化財に指定されて、「大学記念館」として活用されることになりました。そして、その中に設けました展示室に、東亜同文書院や愛知大に関する資料を展示して、学内外からのお客さんにご覧いただいています、ご希望の方々には説明も行なっています。

続いて、「愛知大学公館」(旧師団長官舎)について紹介します。この建物は 1912 年、第十五師団の敷地外に、同師団長の官舎として建築された、和洋折衷の平屋建てです。皇族の久邇宮邦彦(くのみやくによし)王が師団長の時期、のち昭和天皇皇后となる娘・良子(ながこ)も、歴史上の人物ということで敬称は省きましたが、一時そこに滞在されました。愛知大学創設後は公館となり、学長をはじめ教員や学生が滞在・宿泊しました。一時占領軍が接収する情報が流れるも、本間学長らの機転と熱意で免れたこともありましたがこの公館は、現在は使用を休止しているものの、2012 年初夏に「築 100 年記念」の見学会を、同文書院記念セン

ター主催で開きました。

最後に「まとめ」を申し上げますと、まず「創設以来愛知大学に在籍した沖縄出身者は少数であるが、卒業後沖縄に関係することになった人を含め、著名人も存在した」といえます。また、これは個人的な注目点ですが、「近年注目されつつある『戦争遺跡』の面では、愛知大学豊橋校舎の旧軍施設と沖縄の戦跡は同じ本で紹介されてもいて、第三者の視点からは同列に捉えられることもあることから、誤解のない形で“共存”が望まれる」としておきたいと思います。

いずれにしても、今後さらに沖縄と愛知大学とのつながりが広まり深まり、沖縄から一人でも多くの方が愛知大学に入学して下さることを願っております。それでは時間になりましたので、駆け足でしたが私の発表を終わることといたします。皆様には引き続き午後の百田(勝彦)さんのご講演に、ご期待下さいますようお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

藤田 どうもありがとうございました。短い時間、まとめながらお話をしてくれましたが、何かご質問のある方は、ございませんでしょうか。

質問者 私、宮城と申します。愛知大学への沖縄県出身者は、東亜同文書院時代を含めて少ないということですが、直近の5年ぐらいでもよろしいので、実際に毎年どれぐらいの方が受験して、だいたいどれぐらいの方が入学されているとか、データを持っていらっしゃれば、そういうことも教えていただきたいのですが。

佃 受験者のデータはわかりませんが、まず同窓会の沖縄支部のメンバーは、10 人前後で推移しているようです。詳しいことにつきまして、ご存知の方はいらっしゃいますでしょうか。私からも教えていただきたいのですが。

発言者 現在私は、愛知大学(同窓会)の沖縄支部にいます。名簿を見ますと、30 人弱はいます。しかし毎年この時期に、同窓会の支部総会をやるのですが、連絡をして返事が来るのは、だいたい定番の 12、3 人で、毎年活動しております。その中で、東亜同文書院関係でご講演いただいた大城立裕先生、そして、先ほどのお話のように、

愛知大学は東亜同文書院大学を受け継いでおりますから、(大城先生ほか)東亜同文書院の関係者と愛知大学の卒業生とが一緒になって活動しているというのが、支部の状況でございます。

それで、どれぐらいの方が入学されているかということについて、昨日学長と話をしまして、去年の実績では1万 8,000 人が愛知大学を受験しているのですが、沖縄からは1人、2人ぐらいの受験者だということです。(年によって)例外はあるのですが、ご存知のように沖縄は、東京や関東に行くか、関西地方に行くかという傾向が歴史的にありますね。なかなか名古屋のほうへというのは、合格しても、入学はしないということがありましてね、辞退されるかたの率が高いのです。

梅田 愛知大学の現代中国学部で、留学生に日本語を教えております梅田と申します。少し補足させていただきたいのですが、卒業生の数ではないのですが、現代中国学部で今年の春卒業して、沖縄に就職する学生がおります。両親は沖縄に住んでいるので、こちらで生まれたのですが、ずっと東海地方で育ちました。けれども小さい頃の思い出が忘れられずに、どうしても沖縄で就職したいということで、本島の、名前はわからないのですが、よく(プロ)野球の人たちがキャンプインするようなホテルに就職が決まったということで、これからお仲間に入れていただければと思います。ヤマモトと申します、女子学生で。よろしくお願いいたします。

藤田 ちなみに、今同窓会は各県で学生を推薦しています。奨学金 60 万円、無償援助ということでやっておりますので、沖縄のかたの志願者は今少ないようですから、入学していただくと、当たるのではないかと思いますので、よろしくお願いします。

最後にですね、先ほどのお話にありました西さんから、一言お願いできますでしょうか。

西 恐れ入ります。オリオンビールを経て、在職中に西部オリオンというところで、会長という役につきまして、そして今、年金生活に入って、悠々自適の生活をしているところでございます。

藤田 ありがとうございます。西さんは最初は琉球銀行にお勤めになり、その腕を買われてオリオンビールの監査役になられまして、それから西部オリオ

ンという、今は立派なホテルになっておりますけど、そちらの会長役を務められています。

本日の午後講演される百田さんを始めとして、愛知大学卒業生が、沖縄の戦後復興に関して、沖縄で活躍された方々が多いかと、我々は思っております。たいへん心強いところです。これも歴史的な背景があるからこそ、皆さんが頑張っておられることを、知っていただければ幸いです。

午後からは今ご紹介しました、沖縄税理士会会長をやっておられます百田さんです。お風邪を召されまして、今日のために昨日は一日休み、頑張ってお出でてきてお話をさせていただける、ということです。百田さんのお話も楽しみにさせていただき、お聞きいただきたいと思います。とくに戦後税理士試験がまだ不十分であったころ、沖縄に來られて、それをずっと支えて、発展させてこられたお方です。その点でも沖縄の経済に非常に貢献されたのではないかな、というふうに思っております。ぜひ、ご清聴いただけたらありがたいと思います。それでは、午前の部はこれで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。